Step.6

2022年2月

27日（日）

（有）フェリックス

Step.6　コンテンツ

1. オントロジー

2. オントロジーの構成要素

©Copyright Felix Inc., All right reserved.

1. オントロジー（脳レベル 1）

オントロジー

オントロジー（Ontology）とは西洋哲学の『存在論』です。
これは、西洋哲学の根本問題の一つである
「在るとはどういうこと？」
という問いに対する様々な考えです。
20 世紀最大の哲学者であるハイデガーのオントロジーがメトロノームメソッドのレベル 1（もしくは最深部）です。ハイデガーは「存在」と「存在者」を分けました。
「存在」は存在者といったようなものではないということだけである。
ハイデガー著「存在と時間」より
英語で
1.This car is red.
2.There is a red car.
は同じ「is」という be 動詞を使っていますが、レベルが異なります。
1.を言うには 2.が前提になっています。
1．の is は存在者（car）の属性や特徴を表します。
2．の is は赤い車が「在る」ということを表します。
言い換えると2．が前提されていないと 1.も言えなくなってしまうのです。
そういう意味で存在者よりも存在の方がより基底部にあり、同時にメタレベルにあります。
神が居るかどうかを論ずるには、前提として「居るまたは在る（存在）」ということはどういうことかを論ずる必要があります。
『ヘルス』は地球の中心からのエネルギー、水平線から昇る太陽、ベツレヘムの星などの神聖なる『存在者』を源としています。「ヘルスが在る」というレベルは存在者のレベルです。
オントロジーはさらに『存在者』の前提となっている『存在』へ入ります（戻ります）
オントロジーレベルでは定義不可能な最大の集合になり、脳が最高の自然治癒力を発揮します。
言い換えると、ここまで話してきたことを科学的に存在するかどうかを実証すること自体が、まず「存在」とは何か？という問いに答えなければなりません。それは科学には不可能な領域です。
それは漆黒であり、純白であり、眩い太陽の光であり、揺蕩う闇の海であり体験する人ごとに異なる体験になります。
一方でオントロジーレベルに入ると、治療者は患者さんの脳を見失います。
ヘルスまでは、脳の実質を感じながら治療できたのが、『空っぽ』に感じます。
脳と言う『存在者』が消えてしまいます。そして、『存在』が現れてきます。
ではオントロジーレベルに入るにはどうするか？

©Copyright Felix Inc., All right reserved.

アリストテレスの存在論

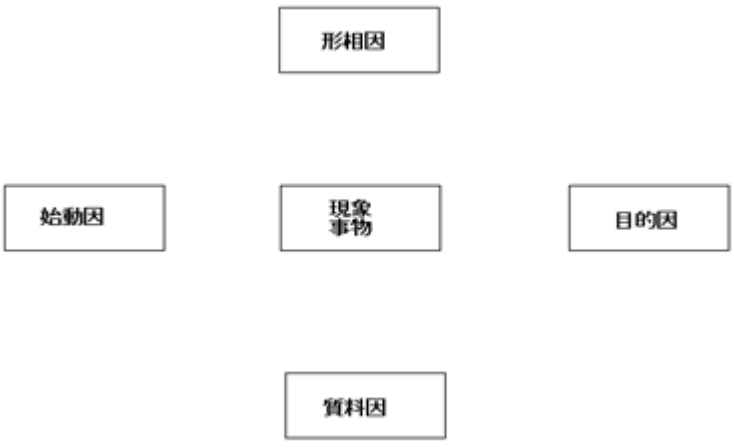
アリストテレスが自著「形而上学」の中で論じた、形而上学は現象についてその 4 種類の原因を検討すべきであるとする説である。

我々が或る物事を知っていると言いうるのは、我々がその物事の第一の原因を認識していると信じるときのことだからであるが、原因というのにも四通りの意味がある、すなわち、我々の主張では、そのうちの一つ(1)は、物事の実体でありなにであるか〔本質〕である(1)けだし、そのものがなにのゆえにそうあるかは結局それの〔なにであるかを言い表わす〕説明方式に帰せられ、そしてそのなにのゆえにと問い求められている当のなには窮極においてはそれの原因であり原理であるからである。つぎにいま一つ(2)は、ものの質料であり基体である(2)。 そして第三(3)は、物事の運動がそれから始まるその始まり〔始動因としての原理〕であり(3)そして第四(4)は、第三のとは反対の端にある原因で、物事が「それのためにであるそれ」すなわち「善」である(4)、というのは善は物事の生成や運動のすべてが目ざすところの終り〔すなわち目的〕だからである。

アリストテレス著「形而上学」

形相因:そのものが「何であるか」 を規定するもの
質料因:存在するものの物質的な原因
始動因:そのものの運動変化の原因
目的因:そのものが存在し、運動変化する目的

家を例にすると、設計デザイン・家屋の構造は形相因、家を造る石や木等の建築材料は質料因、家を造る主体たる建築家(大工)ないし作業は始動因であり、
居住のために造られるという目的が目的因である。



レベル 2 ヘルスで行われた鶏と卵の瞑想は形相因を消滅させるためのプレトレーニングです。

©Copyright Felix Inc., All right reserved.

メルロ＝ポンティの存在論

メルロ＝ポンテイは後期の作品において、言語のみならず身体、知覚、他者をも含めて規定しているような根源的な自発性の作用があるとの見解を肉の存在論から説明しようとする。
彼にとって重要なのは初期作品以来、知覚であり身体であった。メルロ＝ポンテイは知覚と運動とは密接不可分の関係にあり、身体は運動において、動かすものであるとともに動かされるものでもあった。このような身体の再帰性の運動を介して「自己」は構成され、また身体を通じて「存在」へと聞かれていると述べていた。後期メルロ＝ポンテイはこのような地平となる「存在」を身体との類比から「肉 chairJ とよんだ7。そうした「肉」としての存在こそが、他者経験を可能にする超越の基盤でもあるととらえていたのである。メルロ＝ポンティは、わたしと他者、わたしと世界との区別は、結局こうした肉的存在の「裂開」の作用から事後的に成立したものであると説く。地と図、主観と客観、自己と他者等々の諸々の「意味」が生起する肉の裂聞の様相は、非常に生動的なイメージ喚起力の強いめくるめく言葉のヴァリエーションによって表現されている。たとえば、「可逆性」、「交叉配列」、「侵犯」、「間隙」、「昨裂」、「分裂」、「編みあわせ」、「侵犯・蚕食」、「蝶番」、「接ぎ日」、「軸」等々、メルロ＝ポンテイの「肉の裂開」論は、存在者の揺藍とも言える「野性の存在」から、多種多様な存在者が立ち現れる躍動的プロセスを明らかにするためのものだったのである。
さてここでは、このような基盤としての肉＝存在の特質を、動態的側面から考察してみたい。まず「肉」についてメルロ＝ポンティはこう語る。「肉＝わたしの身体が受動的でありかつ能動的であるという事実」すなわち「肉」とは、内外の諸作用が受動か能動か一方に極限されることのない、存在のある様態であるととらえられているのである。さらにこうした「肉」を基盤とする、身体と世界との関係について「感応性」に言及し、それが「身体の〔おのれを動かすこと〕と身体の〔おのれを知覚すること〕、身体の自己への到来」であって、身体が身体自身を動かすことを介して自身を知覚することであるととらえていた。そして、そのような身体はけっして孤立したものではなく、「まわりに取り巻きをもち、この取り巻きの裏面であるような自己」なのであって、周囲の世界からは絶対不可分な存在である。つづいて、つねに「地」なるもの「他」なるものを伴うこのような自己は、特定的にこれと規定することを拒むものであると述べられる。メルロ＝ポンテイは、「触れるものがいつも、まさにおのれを触れうるものとして把握しようとしながら、その把握に失敗し、或る＜…ーがある＞のうちでしかそれを成しとげられないようなぶれをともなった再帰関係であることがわかるであろう。〔おのれを動かすこと〕と身体の〔知覚すること一動くこと〕の含み合いは思考言語の含み合いである」として、ここでもやはり知覚作用をもっ再帰的身体が否応なくもたざるを得ない意味の一方的決定の不可能性、意味の不確定性という特質について注意を促しているのである。そこから「肉とは、この円環の全体のことであって、単に時間一空間的に固体化されたこのものへの内属ではない」と説き、上述のように、一定の時空に極限されることのない、再帰性の生ずるある全体的な在りようを、比喩的に「肉」として構想したのである。
つぎに知覚の主体と客体について説かれる箇所を見てみよう。メルロ＝ポンテイは、「触れられるもの触れるもの」の関係について述べ、「この構造はただ一つの器官のうちに存するのである。 わたしの指の肉＝わたしの指の一つひとつが現象的指であるとともに客観的指であり、相互性、交叉配列の関係に

©Copyright Felix Inc., All right reserved.

ある外と内であり、対になった能動性と受動性なのである」と説くが、これは知覚においては、内外・主客の見かけ上の対立も、実は互いに、ただ一つの身体的器官の能動性と受動性のペアに比すべき現象に過ぎないということである。ところでメルロ＝ポンティが述べるこうした肉における「能動」「受動」の作用は、もちろん、「全体」の運動を特定の視座から把握するものである以上、その実、双方とも他方から切り離し得ず、単独では成立し得ない便宜的な概念設定に過ぎない。そのことは、「能動性と受動性はたがいに蚕食しあっている、しかるに（カントにあっては）両者は現実的対立の関係にある。一指の局所的＜自己＞：その指の占めている空間が感じもするし一感じられもするのだ」との発言からも理解されるところである。こうした感覚における端のない円環的関係をメルロ＝ポンテイはさらに、「能動性がもはや受動性の逆ではなくなる」場であるとも断言している（VI322-323）。メルロ＝ポンティによれば、こうした受動的作用と能動的作用との交叉配列一転換可能性は、「わたし一世界、わたし一他者の交叉配列」である、との言葉からも理解されるように、自他、内外、主客さまざまな状況において現れるものであることになる。すなわち能動、受動の運動が相互に排除し合わない「肉」の円環性こそ、あらゆる対立が生起し、またその転換の可能性を与える基盤であったのである。

メルロ＝ポンティは以上のような存在論の文脈から、「意味」の問題に言及する箇所で、「われわれの能動性の持つ受動性」に関連してつぎのように述べている。「われわれの自発性がどれほど新しいものであろうと、それは存在のただなかで生まれるのであり、それらの自発性が、われわれのうちでしみ出す時間と連動しており、われわれの生のもろもろの回転軸や蝶番に支えられているのであり、それら意味はある「向き」なのである」。

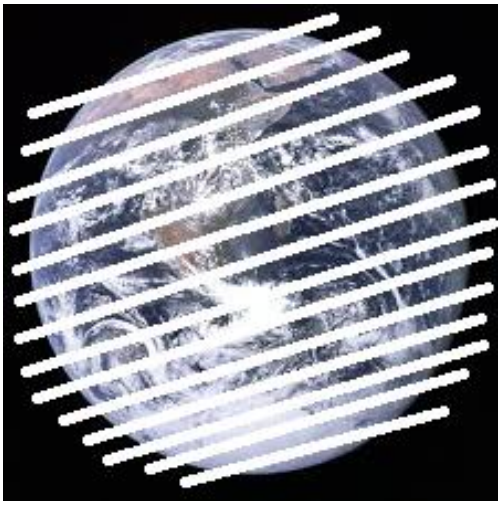
すなわち後期メルロ＝ポンティは、『知覚の現象学」以来の知覚・意味・方向・運動・時間との相関性の問題を、能動　受動が不断に転換する媒介としての肉の存在論という、より根源的、徹底的な視座に基づけて、再び取り上げ、論じなおしたものといえるだろう。

メルロ＝ポンティは他のところでもこのような受動的なものと能動的なものについて再考すべきであると注意を喚起し、「大事なことは、能動的なものと受動的なものとを連帯させている諸概念を再考し、それがもはやわれわれを、存在と真理を説明しはするが世界を考慮に入れないような哲学と、世界を考慮に入れはしてもわれわれを存在と真理から引き離してしまうような哲学との背反の前に立たせないようにすることなのだ」という。すなわち世界と真理とを各々独立した極に固定化して、一方から他方を説明し尽くそうとするような哲学を斥けるべきであって、肝要なのは受動的なものと能動的なものとを相互に連繋、和解させ得る諸概念を構想することであるというのである。

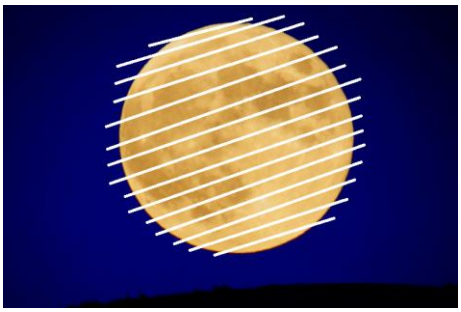
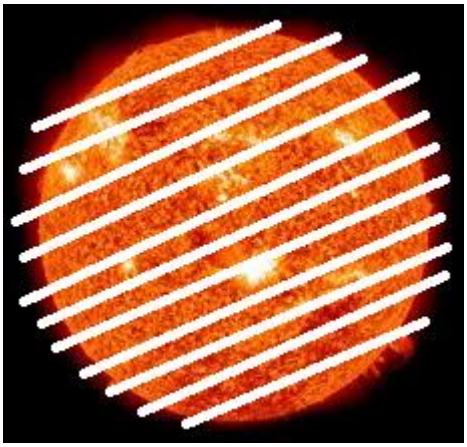
以上から、見るもの　見られるもの、触る一触られる　etc.という、原初的な志向作用、知覚作用の、能動一受動関係が絶え間なく反転するプロセスが、この肉の位相の特徴だといえるであろう。このようにメルロ＝ポンティにおける存在論は、能動一受動、自己一他者、内一外、図　地とが相互に浸食しあうキアスム、肉の裂開の在りょうを極限までとらえようとする試みであったのである。

©Copyright Felix Inc., All right reserved.

Ex. 1 オントロジーの瞑想

	Step 1 肉体の輪郭の消滅 ZoneA の消滅
	Step. 2 自分の座っている床の形の消滅 地面の形の消滅 地球の形の消滅

©Copyright Felix Inc., All right reserved.

 	**Step 3** 月の形の消滅 太陽の形の消滅
 	Step 4 宇宙全体の形の消滅 世界全体の形の消滅 神の形の消滅

©Copyright Felix Inc., All right reserved.

	Step 5 純粋な材料というイデアの消滅
	Step 6 存在者の無＝存在の顕現 ↓ 空

©Copyright Felix Inc., All right reserved.

2. オントロジーの構成要素

オントロジーの構成要素

このレベルでは、治療者も存在者としては『空っぽ』で、患者さんと同じ『存在』のレベルに入っています。
まず、治療者は瞑想が必要になります。
シュニヤ（空とか0を意味する）というクンダリーニ・ヨガで行われる瞑想です。
シュニヤの瞑想を行うことで、自分自身の輪郭が失われていきます。自分自身の輪郭が失われていくとスティルネスに入ります。その状態で、さらに自分以外のモノの輪郭が無くなっていくのを感じます。
その感じが座っている場所、家、地面、地球、月、太陽、宇宙、世界と広がっていくのを感じます。
そして全てが輪郭を失う『純粋質料』とも言うべき状態に入ります。さらに、『純粋質料』という概念も無くなっていきます。存在者としての『絶対無』となります。
その存在者としての絶対無に至ると、そこは『絶対存在』と呼ぶべきレベルです。
これの基になっている考えがアリストテレスの存在論です。
アリストテレスは、存在するとは「形相 form」と「質料 material」の統合と主張します。
シュニヤの瞑想は形相が消えて、質料だけになることです。
別段不思議なことではなく、すべての物質は素粒子でできていると考えれば、見た目の形相は単に人間の感覚でとらえた結果に過ぎないとも言えます。
そうすると『純粋質料』になります。
このような考え方はアリストテレスの師であるプラトンが提唱した『イデア』または概念に相当します。
そしてイデアさえも無いと考えたとしたら、そこには『存在者の絶対無』と言えます。
その裏返しとして、『絶対存在』が現れてきます。
それは大乗仏教、特に竜樹の『空』に相当します。
般若心経で言われる色即是空　空即是色
色は形あるもので、それは空から生み出され、
空即是色は、空が形あるものを生み出しているという意味です。
まとめると、
シュニヤの瞑想 ⟶ 古代インドヨガ（クンダリーニヨガ）
アリストテレスの存在論 ）
プラトンのイデア論 ） 古代ギリシャ哲学
メルロ＝ポンティの存在論 ）
ハイデガーの存在論 ） 現代西洋哲学
竜樹の『空』論 ⟶ 紀元後 1 世紀インド仏教
これがオントロジーレベルを構成します

©Copyright Felix Inc., All right reserved.

因と縁

アビダンマになると、因（hetu）と縁（paccaya）というのは、二つの別のはたらきなのです。
因は原因という意味で、英語なら、cause です。 縁は、英語では condition です。そういうふうに言葉を見てみると、まったく別なのです。 cause は原因で、condition は原因ではなく、条件という意味なのです。ですからアビダンマの世界では、原因と条件という二つの別の意味で、因と縁を考えているのです。
～アルボムッレ スマナサーラ著、ブッダの実践心理学より抜粋 ～
※アビダンマとは仏教の教説の解釈・注釈書。論書。対法。これらをまとめたものを「論蔵」と呼ぶ。「ブッダの教え（ダルマ）に対する（アビ）考究」である。

Ex. 2 オントロジー
クライアントの肩に触れてセラピストがオントロジーに入ります。
クライアントがオントロジーに入るのを待ちます。
最後に脳をチェックする。

©Copyright Felix Inc., All right reserved.